

# 恋する階段

作 加藤純子 絵 かまたいくよ



雨が降っている。中学生になって二度目の梅雨。

梅雨って、なんでこんなに気持ちが悪くしゃくしゃするの  
だろう。おまけに最近彼氏のできた親友の香奈が、カバン  
を机に放り投げて隣の教室の彼氏のところへ飛んで行った。  
カバンくらいちゃんとしまいなよ。あたしは心の中でそ  
う思う。でも決して言わない。嫉妬されてると思われそう  
だから。この間も香奈に言われた。

「梨花も作りなよ、彼氏」

上から目線のキラキラした顔で。あたしは恋愛体質じゃ  
ないのかもしれない。小学校から好きになった子なんて一  
人もいなかったし。「あの子、いいよね〜」なんて女子た  
ちがクスクス笑いながら喋っているのをいつも遠巻きで見  
ていた。香奈も同じタイプかと思ったら中学生になった秋、

彼氏を作った。というか告られた。あの浅野ってやつに。  
サッカー部の浅野が練習の日は香奈はあたしと帰った。

「まあくんがね……」前髪パツツンで、ちよつとガニ股歩  
き。体型がっしり。どっちかというとなつぽい香奈があた  
しに「まあくん」なんて言う。首筋をかりかり搔きながら、  
いい加減にあたしは返事をする。

「あの子、恋って、どうしたら生まれるもの？」

「いやだ、どっちかが好きになつてくれて、告られた時  
からだよ」香奈が笑いながら、どんとあたしの背中を叩い  
た。おまえは告られさえすれば誰でもいいのか。そんな気  
持ちになったが香奈と喧嘩するのも面倒なので黙っていた。  
「ま、ほんとうの恋かまだわからないけど。付き合っ  
てる子がいるのって、なんだか心が落ち着くものだよ」